

❖ 全林研会長賞 ❖ 石川 県 ❖

はくい
羽咋南部林業研究グループ

石川県羽咋市

設 立 昭和41年11月

会 員 男5人

年 齢 28歳～60歳 平均42歳

主なプロジェクト

- 間伐の推進（研修会の開催）
- 小学生の林業体験教室開催

宝達山の林業と林研の取り組み

私たち羽咋南部林業研究グループは、羽咋市と宝達志水町にまたがる宝達山流域の林業家と森林組合職員で結成された研究会です。

この宝（ほう）達山（だつさん）は、加賀・能登・越中の3国にまたがり、緩やかな稜線が美しい標高637mの能登半島の最高峰です。また安土城が完成した年でもある、天正4年（1576）から、江戸時代初期の元和4年（1617）まで、約40年間にわたり、大量に金銀が採掘された金山でもあります。またこの金鉱山で働いていた人達は、宝（ほう）達者（だつもん）とか黒鍬者（くろぐわもん）と呼ばれ、加賀藩では、金の産出が減ると、黒鍬者が持つ技術や能力を活かすため、現在の宝達地区に土地と住まいを与えて、土木技術者として活用しました。

金沢城の石垣や金沢の辰巳用水、天井川で有名な宝達川の工事はもちろん、県内にある古いトンネルの掘削は、ほとんど宝達者がしたといわれています。

また宝達山では、良質の葛根が採れたことから、黒鍬者の副業として、「くず粉」生産が伝統的に行われており、これが江戸期には前田侯にも

愛用されたことから、加賀藩御用達の「宝達くず」として、その名が知られるようになりました。そして400年の伝統を持つ「宝達くず」は、現在では、和菓子の原料として、葛餅や葛きりなどの商品開発もされており、全国各地からの引き合いも多いということです。

このように宝達山は、金山とその技術者の歴史を出発点としており、基礎となる森林の特徴も、能登のアテ林業地域とは、まったく違う特色を持っており、そして私たちも、このような伝統を受け継ぎながら、現在に至っているといえます。

宝達山における林業の始まりは、明治期にようやく始まったとされています。地質が古い花崗岩類を中心とした岩石からなり、マサ土とも呼ばれる宝達山の土壌は、もろく崩れやすいという特徴があるうえ、地形は、日本海に向かう西から北側の斜面が急であり、このため明治期以前の宝達川流域では、下流の田畑がたびたび土砂で埋没するなど、災害が絶えなかったようです。このため明治以降は、森林の伐採を禁止し、土砂の流出防止に努め、さらに水源かん養などの治山事業を中心に植林が進められました。

また戦後は、ようやく林業の振興にも力が注がれ、現在では、昭和30年代から取り組まれた、拡大造林によって作られた人工林が、大部分を占めるようになりました。

宝達志水町の森林は、森林面積7,082ha（森林率63.4%）で、そのうち私有林が4,621ha、県有林363ha、公社造林地881ha、緑資源機構造林地442haなどとなっています。また人工林面積は4,062ha（人工林率57.9%）、樹種別面積は、スギ3,268ha、アテ290ha、ヒノキ90haという状況です。

この地域では、拡大造林期に植林されたスギの品種として、宝達山系由来のカワイダニスギがあり、この時代には、苗の生産も盛んに行われました。このスギの特徴は、宝達山系の南に位置する、津幡町河合谷地区で、約60年前に発見された挿し木品種で、発根が極めて容易なうえ、初期成長が非常によく、しかも木理がきれいでねじれも少ないという、

短伐期柱材生産に向けた品種です。昭和45年頃には、1年間で、650haもの造林が行われ、さらに富山県や新潟県など県外にも出荷されました。そして現在では、約6,000haのカワイダニスギ人工林が造林されています。

また宝達山においては、植林の進行とともに、林道の整備にも力が入られ、現在では山頂を中心に、宝達志水町内に5路線、町外に向けて3路線の林道が張り巡らされています。そしてこれによって拡大造林がさらに推進され、さらに作業道の開設による、高密度路網の整備が進められています。

しかし現実には、宝達山における林業は、必ずしも順調に発展しているとはいえません。

その理由は、多雪地帯のため、毎年繰り返される雪害の影響や、近年多発する暴風雨災害など、我慢を強いられる状況が続いているうえ、長引く木材不況から林業への意欲を失う人も少なくありません。さらに最近では、放棄された森林も目立つようになってきました。また若者の金沢への流出も多く、私たちの林研でも、会員の減少に歯止めがかからないのが現状です。

しかしこのような状況でも、私たち羽咋南部林研では、ひとつでも有意義な取り組みを実践し、前進していこうというモットーで、活動を続けており、その一部を紹介します。

まず間伐の推進を目指し、研修会を実施しています。ここでは地域の実情に配慮した間伐の工夫について検討するとともに、特に宝達山では、毎年冬が明けると、山の崩落が目立つため、作業道の維持管理の方法にも研修をとおして検討を重ねています。

また石川県では、今年度から「いしかわ森林環境税」を導入し、間伐の推進に力を入れています。私たち林研でも、手入れ不足の人工林で、間伐を進めるよう努力したいと考えています。

次に小学生とその親子を招いて、森作り活動を実施し、町民の森林への理解を深めるよう努力しています。特に現在では、金沢で新居を構え、

所有する森林への関心が薄れる傾向が強く、このままでは山の境も不明になることが心配され、この交流をとおして親や先祖が育てた森を守ろうという気持ちを、もう一度思い出してほしいと考えています。

このように逆境ともいえる、これまでの林業を取り巻く環境ですが、ここ数年は、国産材の需要が少しずつ回復し、この能登地域でも、合板メーカーのスギ間伐材利用や、県内住宅メーカーの県産材利用意欲の高まりなど、明るい話題も聞かれるようになってきました。

私たちは、歴史的な面白さや、特色ある特産品もある宝達山をしっかりとPRしながら、さらに新興林業地として、発展していくようこれからもがんばっていきたいと考えています。